



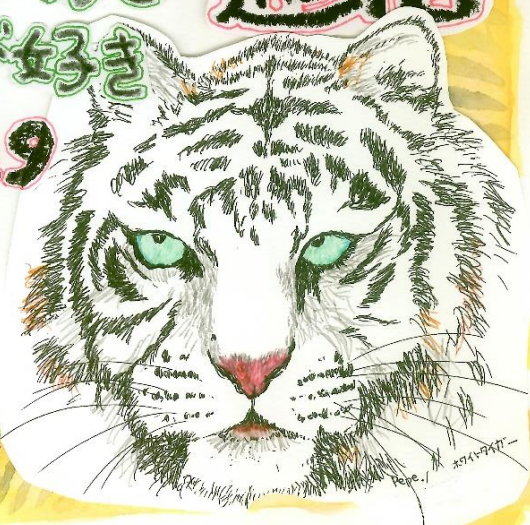
サボちゃん

通信

自然が好き

生きものが好き

No.9



目次

・ありがとう、あきこ	2
・糸米川砂防園周辺でのライトトラップ により採集された蛾の記録	4
・キーワード	6
・青い蝶を探して森の中に	8
・ムシヒキアブ	10
・地味なトンボ	11
・同定の道しるべ	12
・周南市八代盆地のナベヅル	13
・ワンダフルなワンワン物語	14
・表紙描いて四方山話	16
表紙・イラスト	原まゆみ

ありがとう、あきこ

2021年の秋は、この準備にかかりきりでした。12月10日から2022年4月10日まで開催の「動物サポーターの7年」展、ただいま絶賛開催中です！

博物館サポーター制度が始まって7年、どんな活動をしてきたのかを展示しているのですが、そこには「楽しさ」が詰まっています。

展示する昆虫を選び並べ替える作業の大変さを応援しながら、昆虫採集に参加していない私と原さんは美術班と称して会場設営を担当しました。人物のイラストを等身大のパネルに仕上げたり、ライトトラップの白布に無数の蛾をコピーして貼り付けたり、2メートル超えの蛇の抜け殻をどう見せるか工夫したり…工作好きな私たちにとっては楽しいことだらけ。(田中先生の献身的なサポートには感謝しかありません)

そんな中でも発見がありましたよ！「あきこはできる子！」…何のことやらとお思いでしょうが、展示の最終段階、展示パネル設営の時あきこは大活躍したのです。

サポちゃん通信表紙の原画や昆虫カードを展示する時には、村中明子さんがもうちょっと上とか右とか水平垂直を見てくれて比較的簡単にで

きたのですが、いざ美術班二人で作業しようとなるとこれが難しい。寸法を測って糸を張ってもピンで留めるとなるとずれてしまいはかどりません。

そこで、ピタパネ(粘着ボード)の切れ端を利用して22cm×45cmの型紙的な物を作ってみました。使ってみると粘着ボードなので壁に自力で貼りついてくれ、水平垂直も簡単に取れます。作業の早くなったこと！

村中さんの代わりだから「あきこ45」と命名し、「あきこはやるねー」「あきこ頼りになるよ」と絶賛大笑いしながらの作業となりました。粘着力が落ちたら「粘るのよ、あきこ」とはげまし、「あきこが落ちた」と両面テープで補強したり。小さな工夫で楽しく効率よく作業できたのが美術班の一番の収穫かもしれません。

平均年齢60才超え(^_^;)でも、新しい発見や未知の世界がごく身近なところにあると気づかせてくれた動物サポーターの7年、どうぞご覧ください。
(間田 敬子)



昆虫類の展示標本作成作業



サポちゃん通信 表紙原画展示



約100箱の標本展示 昆虫類・貝類・哺乳類・鳥類・両生類

糸米川砂防園周辺でのライトトラップにより 採集された蛾の記録

テーマ展『動物サポーターの7年』に合わせ、今までの採集記録の整理確認をした。今回は糸米川砂防園でのライトトラップについて蛾の採集記録をまとめたので報告する。

2017年8月～2021年10月の間に16回のライトトラップを行った(表1)。季節にもよるが、19:00～22:00の間の2～3時間行い、21:30頃には飛来数が減少する傾向がみられた。1回の採集数は18～88頭で平均63.8頭を採集した。

表1 年別実施回数

2017年8月	1回
2018年6月～7月	3回
2019年4月～9月	6回
2020年4月～5月	2回
2021年6月～10月	4回

月別の採集数を表2に示す。違う年の4月下旬に2回ライトトラップを行ったが、採集数はいずれも20頭に満たない。春先はまだ蛾の発生は少なく、5月以降には急速に発生数が増加する。

表2 月別採集数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
1回	19	33	47	43	37	43	57
2回	18	42	69	80	71	58	
3回		87		44			
4回		88					

季節ごとの発生状況を表3に示す。春から夏にかけて種類と採集数が増え、秋には急に減少した。春～夏は欠損のないきれいな個体が多く採集されるが、秋には鱗粉が薄くなり翅が一部欠損した個体が増える。

16回の採集で得られた蛾は27科309種829頭であった。そのうち未

同定が、134 頭にのぼる。これらが同定できれば、更に科、種とも増やす事ができる。定点で5年間16回の採集を実施したが、毎回初めて見る種類に出会えた。

表 3 季節毎発生状況

	科	種	採集数
春(4,5月)	14	132	301
夏(6-8月)	25	202	397
秋(9-10月)	11	70	157

季節により違った種類が発生するが、この間1頭しか採集できていない種類が175種おり、同じエリアでも発生数が毎年変動するのが確認できた。

山口県内では2,000種類以上の蛾が生息しているといわれるが、それを思うとこのエリアでの発生種はまだまだ多いと思われる。

今後も定点観察を実施して、より多くの蛾の種類を確認していきたい。

(吉本 進)



ライトトラップの展示 実際に使う白布にガ類の写真をはり、採集の様子を再現

キーワード

お盆に実家のお墓参りに行った日の事です。蔵のそばの桜の木のとっぺん辺りから、青緑色のメタリックな光沢のある大きな虫がフワッと飛び立ち、裏山の杉林の方へゆっくり消えていくのを見たのです。

「あのきれいな虫は何だったんだろう」とても気になったので活動の時に話したら、それはタマムシだろうと言われました。見られる条件をいくつか教えてもらおうと、夏、午後、桜というキーワードでした。なるほどピッタリ！あれはタマムシに違いないと思うようになり、捕まえたい気持ちも強くなりましたが、残念ながらその夏は出会えませんでした。

そして、翌年の8月1日、晴れた活動日のことです。この日はちょっとしたアクシデント(メンバーの一人が迷子に?)が起こったため、道具を片付けて木戸神社の駐車場に降りたのは、正午をかなり過ぎていました。そこから自転車組の3人が帰ろうとしたその時、私たちの目の前を一匹の虫がフワッ …ん？ あ！ バシッ!!

思わず手が動き、何かが花壇の中へ落ちました。すぐに3人で探したらトレニアの株元になんと私にはたき落されたタマムシが＼(^o^)/やりました！

そう、真夏の8月1日、木戸神社は桜の名所、時間は午後、3つのキーワードが揃ってのゲットです。(〇〇さん迷子になってくれてありがとう(^◇^))

レジ袋に入れて博物館に持ち帰る間にジワジワと嬉しくなりました。この心理は獲物を啜えて意気揚々とご主人様の元へ帰る猫のはなちゃんと一緒に。博物館に着いた時にはドヤ顔になっていたと思うと、今でもおかしくなってしまう。

この日から私のスマホの待ち受け画面はもちろん「タマムシ」です。

追伸 〇〇さんは、無事に吉敷側へ下山されていました。めでたしめでたし。
(山田 恵美子)



ついに“タマムシ”ゲット



青い蝶を探して森の中に

その日は梅雨が明けて間もない8月の暑い日でした。梅雨の間、なかなか昆虫採集に行けない日が多く目的の昆虫に出会えず、ストレスが溜まっていました。朝の集合時間には既に夏の日差しが降り注いでおり、数多くの虫たちを見つけられる予感がしていました。そこでいつも行っている林道頂上からさらに上った場所を目指すことにしました。



青い蝶はアオスジアゲハだったのか?!

この場所は以前2回ほど行ったことがあり、頂上は開けた草叢でした。集合場所から歩くこと約1時間半、途中でコムスジ、ヒカゲチョウ、オニヤンマを採集しながら到着しました。

ふと気づくと来た方向とは違った下りの道がありました。その道を下るとクサギの花にモンキアゲハ、カラスアゲハ等の蝶達がいって簡単に採集することができました。その時、上空を大型の甲虫が飛んで行きました。飛び方としてはカミキリムシかタマムシの様だったので追いかけて道を下りましたが、見失ってしまいました。その下りの道はかなり広くこのまま降りて行ってもどこかに抜けられるような気がしました。そのままかなり下ったところで行き止まりになっていましたが、上り返す気にはなれず、森の中へ進んでいきました。ここでの判断が後になって後悔することになりました。自分の方向感覚を信じて森の中を歩き回ること1時間、目指していた林道には出られずに集合時間が過ぎてしまいました。その時、携帯電話は圏外で連絡はできず、位置情報も得られない状況でした。なんとかしなくてはと歩き廻ると車の走る音が聞こえました。その方向に歩いていくと小さな沢がありました。その沢を藪漕ぎしながら降りると炭焼き小屋の跡とそこに至る小道があり、その小道を辿って

いくと小さな墓地が見えて、ようやく川のある開けた所に出ることができました。

場所を確認するためにその川沿いの道を下流に歩いていくと赤田神社にでました。そこは自分の目指していたのとはかけ離れていた場所でした。そこから電話をして迎えに来てもらい、私の小さな遭難は終了しました。山で道に迷ったら、たとえ登りになっても来た道を帰ることが大事ということが身に染みてわかった次第である。 (村上敬司)



鴻ノ峰周辺の調査地地図展示 林道は鴻ノ峰方面と吉敷峠方面に別れる



夏の吉敷峠に続く林道 定期的に管理されており、森の中をじっくりと観察しながら採集に専念できる



ムシヒキアブ

夏の昆虫採集日、糸米川砂防園の草原で虫を待ち伏せしていると、トンボではない黒っぽいものがすーっと飛んでいるのを発見！しっぽの当たりが白く目立っています。あの白



シオヤアブ（オス）による捕食

い部分は何だろう？さっそく追いかけて一匹捕まえました。毒びんに入れてから観察してみると、白く見えたものは腹の先に筆の様にまとまって生えている毛でした。ハチの一種かなあ、と眺めていると、ちょうど、水遊びに来ていた親子連れのお母さんも同じ虫を捕まえたところで、「白い毛がきれいですよね～。何という虫でしょうか？」と聞かれました。私はわからなかったもので、近くにいた村上さんに助けを求めると、「ムシヒキアブですよ」と教えてくれました。

白いしっぽのムシヒキアブを博物館の図鑑で調べてみると、他の昆虫を捕らえて体液を吸うハエ目ムシヒキアブ科のシオヤアブのオス（メスには白い毛はない）とわかりました。身体全体に黄色い毛が生えていて、顔だちもシャープでなかなかのかっこよさ。スズメバチを捕まえることもある昆虫界でも最強のハンターで、暗殺昆虫とも呼ばれるそうです。

アブというと、ハチに似ている虫で、刺されると痛いというイメージしかありませんでしたが、こんなにかっこよくて存在感のあるアブがいることを初めて知りました。サポーター活動は新しい発見に溢れています。

ハチは羽が4枚だけど、アブは2枚、ハチはハチ目だけど、アブはハエ目。ハチは刺すけれど、アブは噛む。漠然と似ていると思っていた2種の虫にはっきりとした違いがあることもあらためてわかり、楽しく充実した採集日となりました。（村中明子）

地味なトンボ



オツネントンボ



グンバイトンボ



モノサシトンボ

11月、ひざ丈ほどの草むらを歩いていると1匹の細いトンボを見つけました。こちらがじっとしていると、あちらこちらから同じ色のものが沢山動き出しました。

茶色の地味なトンボ…これが第一印象です。体長3.5cm。目も体も薄い茶色。胸部と細い腹部にある斑紋も濃い茶色。枯れ草の中でとまっていると全く目につきません。多くの種類のトンボが鮮やかな体色や斑紋をもつ中で、「メスもオスもこの地味な姿なの？」と疑問に思いました。

図鑑で調べてみると、オツネントンボという種名。ここで次の疑問が湧きました。「オツネンって何？」。

例えば、グンバイトンボは軍配みたいに広がった脚を持っているし、モノサシトンボには腹部に目盛りのような模様があります。

では、このトンボの何がオツネンなのでしょう？調べてみると冬の過ごし方に名前由来がありました。大半の種類のトンボはヤゴの姿で越冬しますが、このトンボは成虫のまま冬を越すため、年越しを意味する古い言葉「越年（おつねん）」からオツネントンボと呼ばれるそうです。なるほど～！

このトンボ、産卵時期の春に水辺へ移る以外は山林で過ごし、この地味な体色は雌雄や成長過程に関係なくずっとこのまま。唯一、目の一部分だけが成熟すると青くなるそうです。

春になったら、水辺で青い目になったオツネントンボに出会いたいです。
(藤田かおる)

同定の道しるべ

岡田美子

終点



ヒラセノミゾウムシ

ハンドブックで見つからず
原色甲虫図鑑(IV)
で写真を見ながら探す
□
web検索でも探す



採集のとき、ヒラセノミゾウムシと
混同していました。
背中が平らで、ミミのように跳ねることが
和名の由来なんですね！

ゾウムシ科

ハムシ科



コウチュウ目



身近な昆虫が調べやすい
多くの図鑑から甲虫のものを探す

カメシ目



カメシ目か？
コウチュウ目か？
顕微鏡で拡大する

ピエイングで採集

体長 3mm
2022.1.29

口器を観察
アノキ族で
属は不明

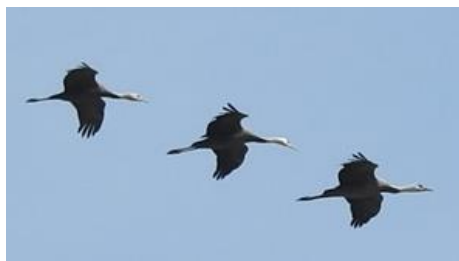
ゾウムシ科で調べる

周南市八代盆地のナベヅル

渡り鳥の季節になり、八代のナベヅル飛来のニュースをきくと見に行く様になっている。周南市八代は本州唯一の飛来地で、昔は鳴き声がうるさいくらいだったと言う、昭和30年代は100羽以上飛来、また昭和30年には特別天然記念物に指定。今はデコイ（おとりに使われる実物大の模型の鳥）を置いて誘引したり、鹿児島県出水市から保護ヅルを譲り受け一定期間飼育後に放鳥する（ツルの移送、放鳥）を実施している。

現地には（野鶴監視所）も設置され屋内からの観察も出来る。

10月下旬頃、飛来して2月下旬～3月初旬にシベリアに北帰行する。シベリアまでの2000kmを20日～40日かけて飛ぶと言われる。小鳥のような可愛さもないし大きさの割には地味な鳥だが飛んでいる姿を見ると（あ～ツルだ）と感慨もひとしおです。（本間喜美恵）



コオーコオーと鳴きながら飛んでいた



成鳥2羽と幼鳥（首から上に茶色の産毛が残っている）



ナベヅル（ツル目ツル科ツル属）
全長約100cm、翼開長約150-160cm
雌雄同色 冬鳥として日本に渡る。
日本での越冬地は、山口県周南市八代と鹿児島県出水水平野の2カ所であるが、他の地域でも越冬することもある。八代の近年の渡来数は十数頭になっている。出水に来る個体数は、ナベヅルの全個体の約9割と考えられている。2022年2月14日13羽が新たに飛来！25羽のナベヅルが八代にいる

ワンダフルなワンワン物語

我が家の愛犬ごんの散歩中の出来事です。あるとき年配の男性から話しかけられました。ごんが男性の娘さん夫婦の犬にととてもよく似ていると言われたのです。さらに話をすると、保護犬だった経緯・年齢や動きが似ているので兄弟犬かもしれないと言われました。近所に兄弟犬がいるなんて考えたことも無かったのでいつかその犬に会えるといいなと思っていました。

ぽかぽか陽気の1月2日、その日がついにやってきました。我が家でイノシシがぼこぼこに掘った地面をぺたぺたならしている時でした。見知らぬ男性が見たことがあるような犬を連れて来られました。先日散歩中に出会った男性の娘さんの旦那様と愛犬令(りょう)君です。2匹の2年ぶりの再会に見ている私たちはわくわくしました。ごんはフェンスの中で飼っているため、まずフェンス越しにクンクン。次に、フェンスの中でリードにつないだままでクンクン。最後に、お互いのリードを外して自由にさせました。互いのおいを確認すると、追いかっこが始まりました。首に軽くかみついたり、相撲のような取っ組み合いをしたりして本気にじゃれあっています。互いに兄弟ということがわかったのでしょうか。

お互いの犬の性格等について話していると、狭い所は苦手で用意した犬小屋には一度も入ったことが無いこと、車に乗るのが怖くて抱っこして乗るとずっとプルプル震えていることなどとても似ていることがわかりました。違うところは爪の伸び具合です。舗装された道を歩く令君の爪は短く、土の上を歩くごんの爪は長くて、互いの住環境の違いが爪に表れていました。

ごんたちは6匹兄弟ですが、他の兄弟もそれぞれの家庭で幸せに暮らしていることでしょう。犬を通じて私たちに新しい親戚ができたような気がします。とてもワンダフルな2022年の始まりでした。

(上田 貴子)

ごんが遭遇する野生動物



奥がごん 散歩コースの野生動物の
おいは熟知している



キツネ（食肉目イヌ科） 母系社会
娘はヘルパーとして子育てに参加



タヌキ（食肉目イヌ科）一夫一妻 ペ
アで子育てを行う 子は雌雄とも分散



イノシシ（偶蹄目イノシシ科）単独性だ
が母娘グループつくることもある



ニホンジカ（偶蹄目シカ科）メスグル
ープを形成 メス子は群れに残る



ニホンノウサギ（ウサギ目ウサギ科）
単独性 年間3-4回出産




ニホンアナグマ（食肉目イタチ科）
単独性 巣穴を使う メスが子育て

表紙描いて四方山話

2022年1月10日にカワネズミ¹⁵を見ました。

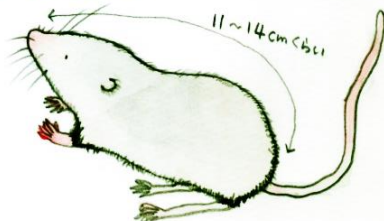
犬の散歩中にふいと川をのぞいて、「大きな魚もいるな¹⁶」
と思ったのですが、ものすごい違和感が!! 銀色に光るその
大きな魚は前後左右にヒレがあって、川縁の石垣の隙間に
20cmくらいかけ上がって入っていました。

○年生きてきて『カワネズミ』を知らなかったのて、なんだかボーッと
してしまって写真を撮るの間に合いませんでした。まあ、もしか
したら、わかっててもそんなヒマなかったかもよあがの
もし次に見かけたら、がんばります!!  原 まゆみ

カワネズミ

トカリネズミ科

モグラに近い
水の中を泳ぐと銀色に
見えるので「銀ネズミ」とも
いいます¹⁷



表紙の説明

今年はトラ年です。

「動物サポーターの7年」展の中にもトラがたくさん
いますヨ!!

トラミジミ、ヒメトラハナムグリ、キヌジトラカミキリ、
トゲヒゲトラカミキリ

表紙にはこの4種が描いてありますが、まだまだあります。
全部鴻巣の峰にいた虫たちです。みなさんも捜してみて
ください。

山口博物館サポーター一動物班活動報告 “サポちゃん通信” No. 9

発行 2022年2月17日

編集 山口県立山口博物館サポーター一動物班

発行 山口県立山口博物館 〒753-0073 山口市春日町 8-2

Tel 083-922-0294 Fax 083-922-0353

サポちゃん通信バックナンバーも閲覧可能

<http://www.yamahaku.pref.yamaguchi.lg.jp/supporter.html>

